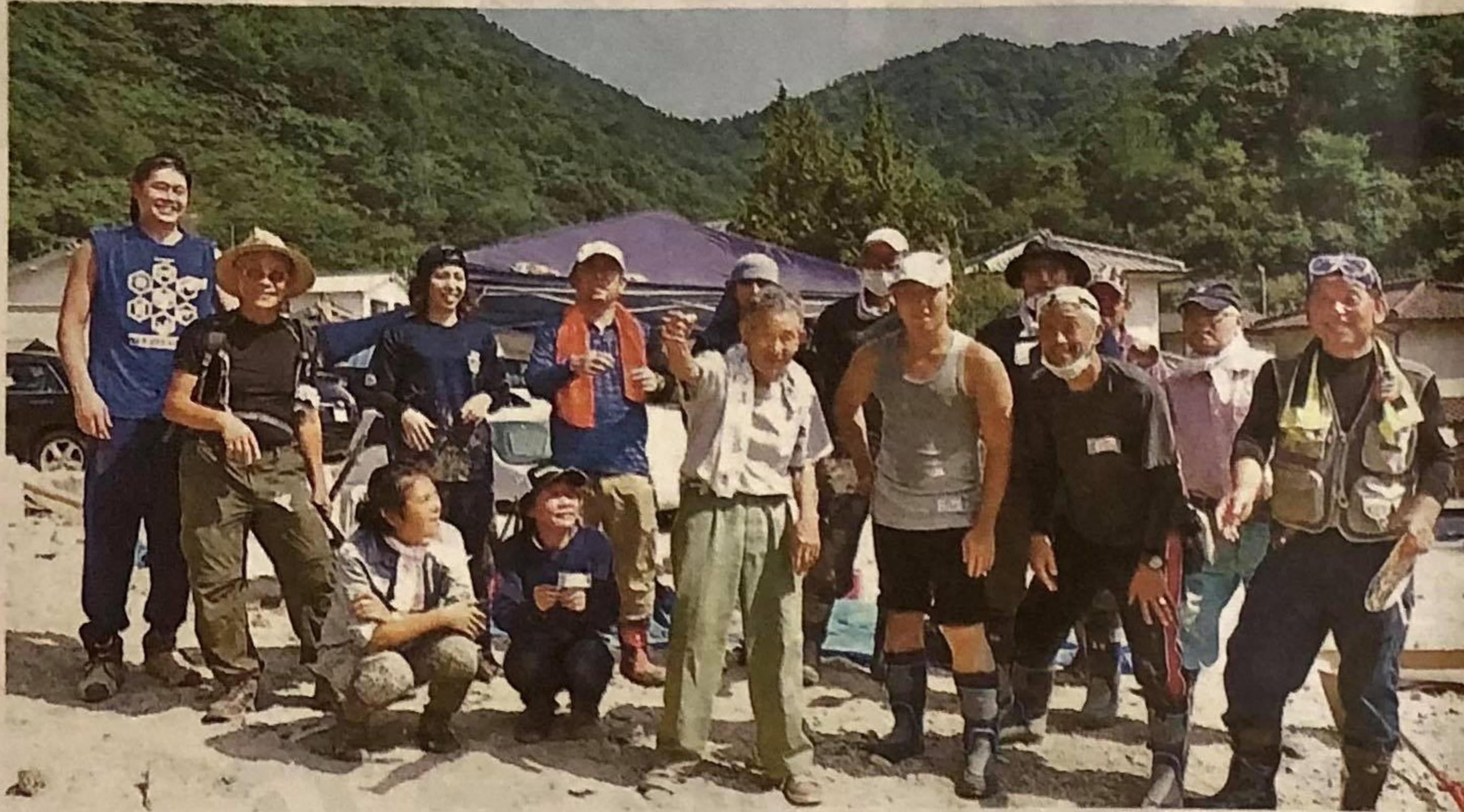


「きこえなかったあの日」の一場面。西日本豪雨で被災した広島県坂町で活動した聴覚障害者のボランティアたち



東日本大震災や西日本豪雨 不安・孤立・奉仕…10年追う

横川シネマでは8~22日と7月1~7日に上映。6月20日の上映後、今村監督と作品に登場する聴覚障害者の親子のトークショウがある。シネマ尾道は6月19~25日に上映し、19日の上映後に今村監督が舞台あいさつする。

「困っている人の力になりたい」という気持ちは、耳が聞こえない人も同じはず」と今村監督。多くの聴覚障害者が、意思疎通への不安からボランティア活動を遠慮してきたと指摘。「耳が聞こえないといつても事情はさまざま。ひとりくくりにせず、一人一人に向き合った大切さを伝えたい」と強調する。

聴覚障害者 災害越え前へ

今村監督は東日本大震災から10年間、全国各地の被災地で撮影を続けてきた。震災の11日後、自宅のある名古屋市から宮城県入り。被災したろう者や難聴者、奔走する聴覚障害者協会の支援者を撮影した。

作品では、テレビに映る海の画面に字幕がなく状況が分からぬ不安や、津波の危険を呼び掛ける音声も警報サイレンも聞こえない恐怖を伝える。避難所に手話通訳者がいないために罹災証明の手続きも生活情報の入手もできず、孤立を深める姿も映し出す。

震災から5年後、熊本地震で撮影した避難所では変化に気付く。手話通訳者を配置した福祉避難所が設けられ、筆談や文字、絵を使った説明が利用可能だと伝えるポスターも掲示されていた。「震災で聴覚障害者の窮状が浮き彫りになったことで、社会の理解が少し進んだ」と感じた。

西日本豪雨では、ろう者のボランティアたちにカメラを向けた。広島県ろうあ連盟(南区)の呼び掛けに応じ全国から集まつた人たちだ。今村監督は派遣先の一つ、坂町で撮影。被災者にボランティアを断られたという難聴の女性や、ともに聴覚障害のある親子が土砂かきに汗を流す光景を丁寧に記録した。

「困っている人の力になりたい」という気持ちは、耳が聞こえない人も同じはず」と今村監督。多くの聴覚障害者が、意思疎通への不安からボランティア活動を遠慮してきたと指摘。「耳が聞こえないといつても事情はさまざま。ひとりくくりにせず、一人一人に向き合った大切さを伝えたい」と強調する。

2018年の西日本豪雨など大規模災害で被災した聴覚障害者の姿を追つたドキュメンタリー「きこえなかったあの日」の上映が、8日に横川シネマ(広島市西区)、19日にシネマ尾道(尾道市)で始まる。自らも耳が聞こえない今村彩子監督(42)は「災害の渦中で少しでも前に進もうとするたくましさを見てほしい」と語る。(木原由緒)

「きこえなかったあの日」広島・尾道で近く上映



「広島で撮影中、ろう者のボランティアの笑顔に背中を押された」と語る今村監督